

第三章 地政学と地詩学の見地から見たクリミア

——マッキンダーとヴォロージン

齊藤 毅

一・一九〇五年の地政学／地詩学

本稿の目的は、イギリスの地理学者ハルフオード・ジョン・マッキンダー（一八六一—一九四七）がその著作で示した、いわゆる「地政学 geopolitics」的歴史理解において、ロシア南方のクリミア半島がどのように位置づけられるのかを、ロシアの詩人マクシミアン・ヴォロージン（一八七七一—一九三二）の、いわゆる「地詩学 geopolitics」の見地からのクリミア観と比較しつつ、検討することにある。ここで「いわゆる……」という言い方をしたのは、マッキンダーも、ヴォロージンも、自分では「地政学」、「地詩学」という言葉を用いたことがないからであるが、マッキンダーの方は、今日では地政学的発想の、実質的な創始者と受け取られていると言ってよい（「地政学」という用語自体が広く知られるようになったのは、ドイツのナチス政権下で『地政学雑誌 Zeitschrift für Geopolitik』（一九二四—四四）、ミュンヘンの地政学研究所を主宰した、カール・ハウスホーファー（一八六九—一九四六）の業績による）。一方、ヴォロージンは、後に見るように、今日のロシアで地詩学的理念に基づいて文化活動を行なう文学者たちから、その精神的祖と見なされている。

この「地詩学」を敢えて定義するなら、ある土地に根ざしたなんらかの創作活動を行なう際の理念であり、その土地の風土、すなわち歴史や文化等を、その土地に固有の地理的要因から捉える態度とすることができると言える。近代以降、人間の居住空間が抽象的座標軸へとますます還元されてゆくのに対し、土地

と人間との具体的な関わりを取り戻そうとする動きと見ることもできよう。言うまでもなく、地政学が今日の国際政治をめぐる言説において主要なディシプリンとなつているのに対し、地詩学の方は、はるかにマイナーかつローカルなコンセプトにすぎない。それにもかかわらず、ここで両者の対置を行なうのは、両者の間には、単なる言葉遊び的な思いつきに留まらない、より本質的な血縁関係があるように推測されるからである。この点で興味深いのは、十九世紀後半から二十世紀前半にかけての同時代を生きたマッキンダーとヴォロージンが、それぞれ地政学的、地詩学的観点を打ち出すのが、ほぼ同時期の一九〇五年前後だということである。もちろん二人の間には何の交渉もなかったはずであるが、この一致には単なる偶然と片づけてしまうことができないところもあるように思われる。

マッキンダーがその地政学的見地を最初に示したのは、一九〇四年一月二十五日に王立地理学協会で行なつた講演『歴史の地理学的な回転軸The Geographical Pivot of History』においてであるが、その背景には、当時の極東での日露関係の緊迫があつた。講演の二週間後、二月六日には日本がロシアに国交断絶を通告し、八日に旅順港攻撃が開始されている。同講演の邦訳者、曾村保信によれば、「その「講演の」直後に行なわれた討論のなかで、マッキンダーは、少なくとも二つの点で非常に強烈な感銘を聴衆に与えた。その一つは、すなわち、すでに世界は一つになりつつあり、もはや英国の「光榮ある孤立」の時代は終わったということである。それからいま一つは、近代におけるロシアの発展と拡張がもつところの世界史的な意義であつた」^{ランド・パワー}。すなわち、マッキンダー自身の術語を用いるなら、大陸勢力大国としてのロシアが中央アジアへの南下、および極東進出を積極化し、さらに、ドイツが一八七一年の統一後、やはりランド・パワー大国としての道を着実に歩んでいるという状況の中で、イギリスは海洋勢力

の覇権国としての地位を守ることが、もはや難しくなってきた。ロシアの極東進出の要であったシベリア鉄道は、一八九一年の露仏協商締結後、フランス資本により敷設を進められたものであり、このように、当時のヨーロッパの国際政治的布置は、独逸伊の三国同盟、および露仏協商を軸に再編されつつあった。こうした中、イギリスは、極東におけるロシアのプレゼンスを弱めるべく、一九〇二年に日英同盟を結ぶ。これによって、イギリスの「光榮ある孤立」は終わり、「英国は地中海からスエズ運河、インド洋、さらにマラッカ海峡を経て極東へと連なる制海権のうち、少なくとも一部を日本と共有することになった」⁵⁰。

さらに、アメリカ合衆国が、一八九〇年の西部フロンティア消滅に伴い、太平洋進出に本格的に乗り出したという事実も忘れることができないだろう。一八九八年の米西戦争での勝利によるフィリピン、グアムの獲得、そしてハワイ併合がその端緒であるが、その戦略上の基礎を示した米海軍少将アルフレッド・マハン（一八四〇—一九一四）の一八九〇年の著書『海上権力シール・パワーの歴史に及ぼした影響』*The Influence of Sea Power upon History*』（日本では明治期より『海上権力史論』の邦題で知られる）が、地政学の先駆と呼ばれているのは象徴的である。マッキンダーが用いる「シー・パワー」という術語も、もちろん、マハンのこの海上権力論を念頭に置いたものである。また、マハンは一九〇〇年の評論『アジアの問題』*The Problem of Asia*』では、大陸国のロシアと海洋諸国の英米日との対立から当時の国際情勢を捉える見解を示し、先ほどのマッキンダーの論点をすでに先取りしていた。そして、こうした彼の諸著作が、日本海海戦を率いた秋山真之ら、日本海軍の指導者たちに多大な影響を与えたということも、よく知られる通りである⁵¹。

このように、一九〇四年から〇五年にかけての日露戦争は、それまでの国際社会におけるシー・パワーとランド・パワーとの均衡関係が新たな局面に入ったことを示す出来事であった。そして、そうした情勢変化の中心にまさにロシアは位置していたのだった。その後、イギリスは、日露戦争でのロシアの敗北を受け、一九〇七年にロシアと英露協商を結ぶ。これによりヨーロッパの列強は、独逸伊の三国同盟、および英仏露の三国協商に二極化し、やがて一九一四年の第一次世界大戦へ突入していった。一九一九年に書かれたマッキンダーの名著『デモクラシーの理想と現実 *Democratic Ideals and Reality*』は、この大戦の経験を踏まえ、大戦後に創設された国際連盟のあり方に対する一つの警告として書かれたものである。

マッキンダーが危惧したのは、今のところドイツとロシアの二国で占められている、いわゆる「ハートランド」から中欧までの二帯を制する国が、なんらかの事情で現れた場合、それは「世界島」としてのユーラシア大陸、およびアフリカ大陸全体を支配する強大な勢力になりかねないということであった。「それは北はバルト海、南は黒海によって挟まれた地峡を完全に占拠し、さらにこの二つの海を閉鎖海にすることによって、ひとまず完成する。つまり、これによって外部のシー・パワーからの有力な干渉をまぬがれることができるからだ。しかし、このまま放置しておく、いづれ中欧の国家——セントラル・パワーズ ジャーナリズムでは、中欧と東欧の一部を支配する国家群のことを、いつしかそう呼ぶようになった——は、やがて地中海に進出して、その制海権も手に入れ、アフリカとユーラシアとは文字通り一体になって世界島を形成することになるだろう」。すなわち、マッキンダーの言う「近代におけるロシアの発展と拡張」は、ピョートル大帝以来のバルト海、および黒海への通路獲得の追求を力学的軸としてな

されてきたのであり、その拠点をなすのが、首都ペテルブルグであり、またクリミア半島なのであった。

一九〇五年前後のヴォロシンの文学活動は、このペテルブルグとクリミアを両極として行なわれていた。彼は一九〇七年にペテルブルグからクリミア東岸のコクテベリに移住し、そこで前年の一九〇六年より着手されていた連作詩『キンメリヤの夕闇 *Kimmerijskie sumerki*』の執筆を進めるが（最終的に完成を見るのは一九一〇年）、これが彼のクリミアを主題とした作品の嚆矢となった。さらに、それと並行して、主にクリミア東岸のフェオドシア出身の画家K・ボガエフスキイに関する評論において、ヴォロシンは自らの「地詩学」的なクリミア観を表明していった。その後、彼が生涯を通じてコクテベリを創作の本拠としたことは、周知の通りである。

こうした経緯により、ヴォロシンは今日、クリミアを拠点に地詩学を提唱する文学者らによって、その先駆者と見なされることになる。「地詩学」という理念を最初に発案したのは、一九八九年に国際地詩学研究所を設立したスコットランド出身の詩人ケネス・ホワイト *Kenneth White*（一九三六—）であると言われるが¹⁰、クリミア出身の詩人イーゴリ・シッド *Igor Sid*（一九六三—）がやはり同じ理念のもと、一九九三年から九五年にかけてクリミアで「現代文化のボスポロス・フォーラム *Bosporskie forumy sovremennoj kultury*」を主催し、九五年にはモスクワに「クリミア地詩学クラブ *Krymskij geopoeticheskij klub*」を設立している。その際、「ボスポロス・フォーラム」のモデルとなったのは、ヴォロシンがコクテベリの自宅を広く人々に開放した「詩人の家」（ここでは言葉の真の意味で創造的な、人々の出会いがあった）であり、また、「クリミア地詩学クラブ」では、そのシンボ

リックな「創始者」としての地位がヴォロージンに与えられた¹¹⁾。シッドは次のように述べている。「ツヴェターエワの〔回想での〕解釈によるマクシミリアン・ヴォロージンは、あらゆる点から見て、世界文学における地詩学（この語の意味するところが何であれ）の最初の、同時に巨人的な人物である」¹²⁾。こうして、二十世紀の初めと終わりに——ソ連成立前と崩壊後と言い換えてもよい——同じクリミアの地で地詩学的動きが起こったのも、けっして偶然ではないだろう。というのも、ヴォロージンも述べている通り、クリミアはその特殊な地理的位置ゆえに複雑な歴史を経験してきた地域であり、そうした地政学的要因こそが、クリミアの文化を決定づけていると言えるからである。そして、地詩学は、まさにそのためにつねにクリミアの地が巻き込まれることになる政治^{ポリティカ}への、一つの反作用と見なすことができるだろう¹³⁾。

一九〇五年前後にヴォロージンが地詩学的発想へと導かれていった要因としては、当時のロシア詩壇の状況も大きく関与していた。言うまでもなく、この時期はロシア象徴主義の隆盛期に当たるが、ヴォロージンがクリミアの地で「歴史的風景（画）『istoricheskij pejzazh』」というコンセプトのもと創作を行なうことになるのも、この象徴主義的環境の中で養われた詩学^{ポエチカ}によるところが大きい。ロシア象徴主義の機関誌的存在であった雑誌『天秤座』の創刊は一九〇四年、『金羊毛』の創刊は一九〇六年であるが、当時パリに住んでいたヴォロージンは、前者のパリ特派員として寄稿していた。一九〇五年には、西欧からロシアに帰国した詩人ヴァチエスラフ・イワノフが、ペテルブルグの「塔」と呼ばれた建物に居を構え、そこで「水曜会」の集まりを始める。一方、一九〇六年四月にM・サバシュニコワと結婚後、パリを引き上げ、ロシアへ戻ったヴォロージンは、「水曜会」の常連となり、その討論に積極的に参加

するようになった。同年十月には「塔」のイワーノフ宅の一階下の部屋を住居とし、十二月には、前述した通り、『キンメリヤの夕闇』の第一篇が書かれる。このように、この時期イワーノフの強い影響下にあったヴォローシンは、とりわけ「水曜会」での「エロス」をめぐる議論に入れ込み、それがやがて彼自身の「歴史的風景（画）」という考えに発展してゆくことになる¹⁴。しかし、ちょうどその折、一九〇七年三月頃からイワーノフとサバシニコワの間に恋愛関係が生まれ、ヴォローシンは失意のうちにクリミアのкокчевериへ去っていった。そして、そこで『キンメリヤの夕闇』の本格的な執筆にかかるわけである。

こうして、あたかもヴォローシンの個人的生と、当時のロシアの地政学的状況、その潜在的力学とが照応するかのように、彼の創作は、ペテルブルグとクリミアという両極の緊張関係のうちに進められていた。ここで想い起こしておきたいのは、ヴォローシンが自らの住むクリミア東岸を「キンメリヤ Kimmeria」と命名し、それが彼のクリミア観の枢要になっていたことである。エカテリーナ二世治下の1783年、オスマン帝国の属国であったクリム・ハン国がロシアに併合された際、このクリミア半島は、その古代ギリシア名にちなみ「タヴリダ Tavrida」（タヴリダ州 Tavricheskaja oblast）と命名され、ロシア詩においても、それが十八世紀以来、クリミアの伝統的な呼称となっていたが、この「クルイム Крым」から「タヴリダ」への改名には、ある政治的意図が隠されていた。それは、当時エカテリーナ二世が抱いていた「ギリシア計画」——コンスタンチノープルをトルコより奪回し、そこを首都にギリシア正教帝国を建設するという計画——の理念を背景になされたものであり、こうしたクリミアのギリシア化という路線に従い、クリミア統治を任された新ロシア総督^{ノヴォ}G・ポチョムキンは、半島各地の都

市をギリシア名に改名していったのだった。つまり、ヴォローシンは、「タヴリダ」という伝統的呼称に潜む文化イデオロギー的意図に抗することを狙いとして、クリミア東岸をことさらに「キンメリヤ」と呼んだわけであるが、その際、彼が強調しているのは、この地名が持つ多言語性である。彼はこの名が語源的には「蝕、蝕」を意味するとしながら、その語根はタタール語、ヘブライ語、ギリシア語、ロシア語等にも見られると述べている。こうして、「タヴリダ」という地名が、ギリシアという「正統的」文化への一元化を目指すのに対し、「キンメリヤ」のほうは文化の多元化を志向する¹⁵。言い換えるなら、土地の統治という政治にとつて、そうした一元化がある意味で宿命的なものであるとするなら、詩学はその宿命を解体してゆくのである。

ここでペテルブルグとクリミアの二極の対置に戻るなら、歴史的陽としての首都ペテルブルグに対し、クリミアは、ヴォローシンによるならば、歴史的陰、「蝕」として位置づけられる（「歴史的辺境」というのが、彼のクリミアの定義である）¹⁶。ランド・パワー大国としてのロシアにとつてクリミアは、シー・パワーに対峙する二つの拠点の一方であったが、ヴォローシンはあくまでもそれを「詩II創造的」に解体しようとする。この解体は、自らが生において占める位置を、地理・歴史的な時空間の中で解釈し、その時空間をも自らの生というテクストにコンテクストとして織り込むという行為を通してなされるが、ヴォローシンの場合のそれは、見方によっては、ロシアの地理・歴史と自らの生を恣意的なまでに結びつけること、いわば、地理・歴史の無根拠な固有化のようにも見えることだろう。イワノフの住んだ「塔」はペテルブルグのタブリーチエスキ通りにあったが、この通りの名は、言うまでもなく、ポチョムキンのために築かれたタヴリダ宮殿 Tavricheskij dvorec に由来する。

ヴォローシンはこの陽根^フ根^ル男^ス根的、かつ秘^エ教^テ的^リな「塔 *Bashnja*」を去り、タヴリダならぬキンメリヤの地に、あらゆる人に開放^エ的^クな「詩人の家 *Dom poeta*」を置いたのだった。

二、陸と海、クリミアとロシア

以下では、マッキンダーの地政学的理解におけるクリミアの位置づけを、ヴォローシンの見解と比較しつつ、具体的に検討してゆきたい。その際、マッキンダーについては、日露戦争直前の『歴史の地理学的な回転軸』のみならず、第一次世界大戦後の『アモクラシーの理想と現実』を、また、ヴォローシンについては、一九二五年に書かれた『クリミアの文化、芸術、史跡 *Kultura, iskusstvo, pamjatniki Kryma*』を主に参照することにした¹⁴。いずれにおいても、一九〇五年前後に生まれた両者の発想が、完成され、かつ敷衍された形で示されているからである。

マッキンダーの地政学的発想の根幹は、右に見てきたことからすでに明らかのように、シー・パワーとランド・パワーとを対置し、その拮抗関係の変遷として歴史を見るといえるものである。ランド・パワーが草原を馬で、砂漠を駱駝で機動的に移動する勢力を指し、特にユーラシア内陸の諸民族が念頭に置かれているのに対し、シー・パワーは海を船で移動する勢力を指す。古代以来の世界史を通覧すると、シー・パワーが世界的に大きな勢力となるのは、かなり時代が下つてからのことである。その発展段階は、(一) エジプト、メソポタミアなどの古代河川文明、(二) ギリシア、ローマ等の内海文明の時代を経て、(三) イスラム帝国やヴァイキングの西洋文明の時代に到り、十六世紀の西欧諸国による「大航海時代」でその最終段階を迎える。マッキンダーによれば、この時代に「アジアとヨーロッパの

勢力的な立場」〔G：二七三〕の逆転が起こる。なぜなら、外洋への広範な進出によって、西欧諸国は「海側から彼ら〔中央アジアの遊牧民族〕の後背を衝く」ことが可能になり（それまでは「スエズ地峡がシー・パワーを東と西に大きく分けていた」〔G：二七二〕）、「これまで彼ら〔ヨーロッパ人〕の存在に脅威を与えていたアジアのランド・パワーを、こんどは逆に政治的、軍事的に包囲できる立場に立った」〔G：二七四〕からである。

こうして、マハンらの海上権力論、マッキンダーの表現によるなら「前世紀の末にアメリカの提督マハンが世に問うたシー・パワーの新しい福音」〔D：二九〕も、十六世紀以降可能となった、外洋の無制限の移動を条件としていることになる。「世界の陸地が離ればなれに存在しているのにたいして、これを取り囲んでいる海はひとつにつながっているという事実は、やがて海を制する者は世界を制する」という制海権の理論に地理学的な根拠をあたえた」〔G：二七三〕。しかし、マッキンダーの独自性は、こうした見方に疑義を唱え、マハンの言うシー・パワーにランド・パワーを対置し、両者のバランスを追うことを自らの発想の根幹としたところにあつた。したがって、マッキンダーによれば、十六世紀はけつしてシー・パワー優位が確立した時代ではなかつた。「西欧諸国が海上に勢力を拡大したチューダー王朝の世紀は、同時にまたロシアがモスクワを起点としてシベリアに発展をとげた時期でもあつたわけだ。〔……〕これらの両者が持つ政治的な意味の重大さについては、どちらが優るとも劣るともいえない気がする」〔G：二七四―二七五〕¹⁸。実際、「世界を制する」のはランド・パワーの方だというのがマッキンダーの結論であり、日露戦争直前の一九〇四年当時は「ランド・パワーのほうも、まだ依然として健在であるばかりか、最近の一連の事件は、ますますその重大さが増したことを物語って

いる」〔G:二七四:傍点は引用者〕のだった。

ここでヴォロシンによる「地詩学」的言説に目を転じるならば、歴史におけるランド・パワーとシー・パワーの拮抗という契機は、彼のクリミア観のうちにも見いだすことができる。半島とはいえ、アゾフ海や数々の塩湖、砂洲によって大陸から切り離され、深い入江や海峡により海を自らのうちに取り込んでいるクリミアは、陸と海とが相互浸透する場所であることを確認したうえで、ヴォロシンは次のようにクリミアの歴史を定式化する。『ジーコエ・ポール』と『マレ・インテルヌム』がクリミアの歴史を規定してきた〔二二二〕。「ジーコエ・ポール Dikoe Pole」とはクリム・ハン国とロシアとの間に広がる草原の古名であり、「マレ・インテルヌム Mare Internum」(原義は内海)は、知られる通り、地中海のラテン名である¹⁹。クリミアにとって、大陸は流動的要素をなし、そこを通過して「アジアの奥地からヨーロッパへ諸人種、諸民族の氷河と雪崩が流れてくる大洋の水路」〔二二二〕であり、一方、海は安定的要素をなし、そこでは「絶え間なく規則正しい脈拍となって地中海文化の潮が満ち干」していた。これら二つの要素の相互作用により、クリミアのいわば歴史的地層が形成されてきたわけである。

「ジーコエ・ポール」としてクリミアは最果ての淀み〔zavod〕であった。〔……〕そこへ人間の奔流をなす一つ一つの流れが溢れんばかりに注ぎ込み、穏やかな行きどまりの淀みの中で動きを鈍め、浅い底にその泥濘を積もらせ、互いに層をなして重なり、やがて有機的に混じりあったのだった」〔二二二〕。

こうして形成された「ジーコエ・ポールの沖積層」をなすのは、「キンメリオイ、タウロイ、スキタイ、サルマタイ、スラヴ……」の諸民族〔二二二〕、つまりは、(スラヴ人を除き) マツキンダーが歴史上ランド・パワーを担ってきた勢力と見なしている、ユーラシア内陸の草原を馬で移動する民族

たちである。一方、「ギリシア、アルメニア、ローマ、ヴェネツィア、ジェノヴァの人々」は、「ポントス・エウクセイノス〔黒海のギリシア名〕の交易的、文化的酵母 *torgoye i kulturnye drozhzhi Ponta Eksinskogo*」、すなわち、交易と文化を醸成させるものとしての役割を果たした「二二二」。こちらはシー・パワーの勢力であるが、注意したいのは、『ポントス・エウクセイノスの』という限定からも明らかのように、これらはすべて、先のシー・パワーの発展段階で言えば、内海文明に属するというものである。つまり、ヴォローシンがここで語るクリミアの文化の特性は、外洋文明の最終段階たる十六世紀以前に形づくられたということになる。

しかしながら、右の引用で「沖積層」を形成する民族として最後に挙げられているスラヴ人のうち、十八世紀にクリミアにやって来たロシア人については別である。ロシアは十六世紀のシベリア遠征からランド・パワー大国としての道を歩み始めたのであり、それは、マツキンダーによれば、西欧諸国の外洋への進出と同等の意義を持つのであった。そして、ヴォローシンも、ロシア人をジーコエ・ポーレからの最後の波としながら、それがこれまでの波とは別格であることを明確に意識していた。つまり、十六世紀を境に「時代と視点が変化した」のである。「キエフ・ルーシにとつてタタール人は、もちろんジーコエ・ポーレであつたが、クリム・ハン国はモスクワにとつては、その突然の襲撃で煩わせる、威嚇的な強盗の巣窟だつたのだ」〔二一六〕。倍点は引用者。そして、「十八世紀にジーコエ・ポーレは新たな蛮族バルバロスの波によつてクリミアを沈めた。この度は、それはより深刻であり、かつ長引いた。というのも、この蛮族とはロシア人であり、彼らの背後にあるのは、遊牧民族という不安定で流動的な水ではなく、サンクト・ペテルブルグ帝国という重厚な土台だからである」〔二一五〕。ここで「ロシア帝国」

ではなく「サンクト・ペテルブルグ帝国」という言い方がされていることは見逃せない。それによつて、ロシアのクリミア併合がバルト海沿岸のペテルブルグを拠点として行なわれたということが、ことさらに示されているのである。

このロシア人の波がクリミアにもたらしたのは、「火と剣による庭園と集落の根絶」「二一六」だった。つまり、それは文化的土壌の根絶であるのみならず、クリム・ハン国のタタール人たちの見事な治水術により一面「庭園」と化した、クリミアの物質的な土壌の根絶でもあったのだ（ヴォローシンはクリム・ハン国時代に「クリミアの真に固有な文化が開花した」「二一五」としている）。そうした根絶は十八世紀前半のミニフとラツシによるアゾフ海遠征に始まるが、エカテリーナ二世による併合に到り、「クリミアは、ボスポルス海峡の鍵も持たずに地中海から切り離され、あらゆる交易路から遠く離れたところで、口のない袋の底で喘いでいた」「二一六」。加えて、この時代には、先述したクリミアの「ギリシア」化も進められていった。「ある面ではポチヨムキンの夢想ロマンチズムから、またある面ではエカテリーナによる宣伝を促がすため、それらの都市には擬古典主義的な名（ギリシア語由来の名）——セヴァストポリ、シンフェロポリ、エフパトリア——が付けられた」「二一六」。こうして、ロシア人の襲来は、古代以来、歴史的に形成、ないし醸成されてきたクリミアの文化を決定的に破壊してしまつたのだ。すでに一九〇七年にヴォローシンはこう書いている。「この古代の土地が「……」このロシア支配の世紀以上に完全な荒廢の時代を経験したことはまずあるまい」²⁰。

以上のようなヴォローシンの歴史解釈は、マッキンダーの地政学的図式と概ね一致していると考えることができ、それを説明するためには、まずマッキンダーが用いる「閉鎖海」、および「ハートラ

ンド」という二つの概念について見ておく必要がある。シー・パワーとランド・パワーが対峙している場合に、ランド・パワーの方がシー・パワーの基地となりうる沿岸地帯の拠点を完全に支配してしまえば、シー・パワーはその一帯に対しては無力となり、ということとは、ランド・パワーはその海を内陸から支配することが可能になる。そのように支配された海を「閉鎖海 a closed sea」と呼ぶわけである。「D・四四―四八」。一方、「大陸の心臓地帯」とは、シベリア平原からイラン高原までの、海からの交通によつてはアクセスが不可能な巨大な地域を指す「D・九〇」（ジーコエ・ポーレがその一部をなしていることに注意していただきたい）。したがって、ランド・パワーがハートランドをpushした上で、各地の海を閉鎖海にしてゆくなら、それはシー・パワーが到底対抗しえない強大な勢力となることになる。

そして、そうした事態は、実際に黒海においても起こりうることだった。「ローマの全盛時代には、船乗りの領分が黒海の北岸まで拡張されたが、オスマン・トルコの時代には、ハートランド——騎馬民族の領域——が「バルカン半島の」ディナルアルプスと「トルコ南部の」トロス山脈の線まで押し進められた」。「D・二二五―二二六」。ヴォローシンの言うところの「口のない袋」となりうる。「とすれば、むかつては地中海の内海文明圏の一部をなしたが、その沿岸一帯が強力なランド・パワーによつて占められるならば、それは閉鎖海（ヴォローシンの言うところの「口のない袋」）となりうる。「D・二二六」。しろいつそ黒海沿岸のすべてがハートランドに属すると考えておく必要があるだろう」。「D・二二六」。そして、この黒海閉鎖海化の事業をトルコから受け継いだのが、言うまでもなくロシアであった。「ハートランドから外へ出る最も自然な道は、ボスポラス、ダーダネルスの両海峡を通過する海のルー

トである。前にも述べたように、かつてのローマは黒海をその最前線とし、コンスタンチノープルを地中海のシー・パワーのための出先の根拠地として、草原のスキタイ人にそなえた。が、ニコライ一世「……」治下のロシアは、いわばこの政策を逆手に取って、黒海とその南側の出口とを支配することにより、そのランド・パワーの限界をダーダネルス地方までひろげようとした「D・一五八」。ここで言われているのは、一八三三年に露土間で結ばれたウンキヤル・スケレッツシ条約のことであるが、これによりいわゆる「海峡問題」が持ち上がり、クリミア戦争への伏線となる。

こうしたロシアによる黒海の閉鎖海化の試みが、オスマン・トルコによるそれよりも強固であったとするならば、それはランド・パワーとしての基盤の違いによるものである。まず、モスクワ大公国によるカザン、アストラハン併合、続くシベリア遠征にしてからが、それまでのランド・パワーによる領土拡大とは、質的に異なるものであった。「そもそも中世の終わり頃に、ロシアのコサック達が最初にステップを管理するようになったときから、大きな革命が起こった。というのも、それより前のタタール人は、アラビア人と同じように、永続性のある帝国を建設する [to found a lasting Empire] のに必要なマン・パワーの基礎に欠けていたからだ」[D・二二八・一三六]。つまり、それ以前のランド・パワーの主要勢力、すなわち「騎馬民族」の領土拡大とは異なり、ロシアの場合、「コサックの背後には [behind the Cossacks] 定住民族、すなわち「ロシアの農民達」の「マン・パワー」が基礎としてあり、「それが現在バルト海から黒海にかけて、億をもつて数えるにいたっている」[D・二二八・一三六―一三七]²¹。このマッキンダーの叙述はモスクワの東進に関するものであるが、それと、先に引いたヴォロシンのクリミアに関する叙述との類似は明らかだろう。「彼らの背後にあるのは [a thick

spinoj)、遊牧民族という不安定で流動的な水 [zybkie i tekuchie vody kočevogo naroda] ではなく、サンクト・ペテルブルグ帝国という重厚な土台 [tjazhelye fundamenty Sankt-Peterburgskoj imperii] だからである」
【二一五】。

こうして、ロシアによるクリミア併合とは、ランド・パワーたるロシアが、バルト海沿岸に一つの拠点を押さえた上で、そこ、すなわち首都ペテルブルグを中心とした帝国を築き、それを基礎として、今度は黒海を閉鎖海化しようとする試みであり、ヴォロシンの言うクリミアの文化の特質が海と陸との相互浸透である以上、それはクリミアの(物質的、また精神的な)土壌の荒廃を意味した。一方、マッキンダーの観点からすると、ロシアのこの試みが成功するならば、ロシアはバルト海から黒海に到る一帯、マッキンダーが「東欧」と呼ぶ一帯を制することになり、ということとは、そこに接するハートランドをも制することになる。そして、ハートランドを制してしまえば、「現在すでに」〔……〕理論上ひとつながりであるだけでなく、事実においてもまた一つの島、すなわち「世界島」^{ワールドアイルランド}となつていゝる「ヨーロッパ、アジアおよびアフリカの三大陸」〔D…七七〕を制する可能性も見えてくることになる。知られる通り、マッキンダーはこれを次のように定式化している。「東欧を支配するものはハートランドを制し／ハートランドを支配するものは世界島を制し／世界島を支配するものは世界を制す」〔D…一七七〕。日露戦争に続く第一次世界大戦とは、この東欧の地をめぐるロシアとドイツとの争いに他ならないのだった。

三、クリミアの未来

したがって、第一次世界大戦の教訓とは、「東欧におけるドイツとスラブ間の問題に最終的な結末」をつけなければならぬということ〔D：一七六〕、そのために「ドイツとロシアのあいだに複数の独立国家からなる中間層」が必要であること〔D：一八六〕、そして、「東欧とハートランドに君臨する大國が海洋における戦争の準備を進める場所は、バルト海と黒海の内部」であるゆえ、両海への出口は「なんらかの方法で国際化されなければならない」〔D：二〇四〕ということである²²。そこでマッキンダーは、大戦後の国際連盟創設に関連して、次のような提案を行なう。

ここでいっそのこと提案したいのは、コンスタンチノープルという由緒の古い歴史的な都市を国際連盟のワシントンにしたらどうか、ということだ。／世界島をカバーする鉄道のネットワークが完成した今日、コンスタンチノープルは、汽車でも、汽船でも、また飛行機でも行ける、世界で最も便利な場所 [one of the most accessible places on the globe] にある。コンスタンチノープルを中心にして、われわれ西欧の主要な国民は、これまで数世紀間まさに最大限に抑圧されていた〔諸〕地域、人類全体のなかでもとりわけ光明を必要としている〔諸〕地方に光を投げかけることができる。またコンスタンチノープルを中心にして、われわれは西洋と東洋をつなぎあわせ、自由な海洋の力を永久的にハートランドに「浸透」させることも [permanently penetrate the Heartland with oceanic freedom]、また可能だろう」〔D：二〇四—二〇五；二一五—二一六〕。

含蓄に富んだ一節であるが、特に注目したいのは、シー・パワーとランド・パワーとの「浸透」について述べている箇所である。無論、これはハートランドをランド・パワーに独占させないための戦略として言われているのであり、しかも、一九一九年当時、イスタンブールが連合国の占領下にある状況でのこの発言がどれほどフェアであるのか、慎重な判断が必要とされようが、しかし、クリミアの文化の特性を海と陸との相互浸透とする、ヴォローシンの記述との類似は、やはり否定することができないだろう。

一方、ヴォローシンはクリミアについて、一九二五年（ちなみに二三年にトルコ共和国が成立している）の時点で次のように述べている。

クリミアがその歴史のすべての期間を通じて、エカテリーナによる征服の時代ほどの荒廃を経験したことは、おそらく一度もなかっただろうが、それはロシア民族と苛烈な帝國的政策〔*tjazhelaja impereskaja politika*〕だけの咎ではなく、クリミアが自由な海の道から〔*ot svobodnykh morskikh putej*〕、すなわち生命を吹き込む、地中海の呼気から切り離されたことにもよるのだ。もう二世紀の間、クリミアは岸に引き揚げられた魚のように喘いでいる。／かつての隊商の道に沿って北緯四十五度鉄道が通るときにのみ、クリミアはえらを肺に変え、存分に呼吸できるようになるだろう〔二一九〕。

ここで確認されているのは、ソ連邦成立後の一九二五年にも、クリミアが半島にもかかわらず海から切り離されているという状況に変わりはなく、そのためにクリミアの土地はいまだ荒廃したままだとい

うことである。しかし、ヴォローシンは、クリミアに再び「地中海の呼気」が吹き込まれる可能性については否定的に考えているかに見える。そこで彼は陸からの変化に期待し、クリミアが「えちを肺に変える」ことに希望を見いだすのだが、それが北緯四十五度鉄道である。

当時の国際社会の地政学的布置における鉄道網の重要性については、上に引用したマッキンダーのくだりでも強調されており、特に彼が念頭に置いているのは、パリ・イスタンブル間を結ぶ、いわゆるオリエント急行のことと思われる。それに対し、ヴォローシンの言う北緯四十五度鉄道は、「かつての隊商の道 *staryj karavannyj putj*」^{〔二二二〕}、すなわち、クリミアの草原からキンメリア・ボスポロス（ケルチ海峡のギリシア名）へ向かい、さらにカフカス、ペルシアを経て、インドへと到る道に沿って敷かれるはずであった。この道は、十六世紀前夜、「オスマン帝国が近東を経るあらゆる交易路の上に鎮座し、ヴァスコ・ダ・ガマが新たな海路を発見すると」寂れてしまったが、しかし、「この陸路への需要がなくなったわけではな」^{〔二二二〕}く、とくにインドの宗主国イギリスにとってはそうであった。このインドへの通路という点で東地中海に利害を有していたイギリスは、そのためにクリミア戦争に参戦したのであり、一八五六年、戦後のパリ条約では、ロシアへのセヴァストポリ返還と引き換えに、イギリスによってクリミアに「インド電信」が引かれることになった。その電柱はフェオドシアからシンフェロポリに向かう街道でも目にする事ができ、街道を外れてさらにインド電信に沿ってゆくとぶつかる二つの谷、「インドル *Indol*」は、タタール語で「インドへの道」を意味するのだった^{〔二二二〕}。

そして、第一次世界大戦時には、「やはりイギリスの圧力と要望により、「ロシア」帝国政府はすでに北緯四十五度鉄道の実現に着手していた」^{〔二二二—二二三〕}。それは、イギリス、フランス、イタリ

ア、ユーゴスラヴィア、ルーマニアとヨーロッパを走り、クリミアからケルチ海峡の橋を渡り、トルコ、ペルシアを抜け、インドに到着する経路を予定していた。ロシアはケルチ海峡に懸ける橋の位置まで決めていたが、続く内戦と新たな政治状況のために計画は中断してしまった。しかし、ヴォローシンは「この鉄道が早晩、かつての隊商の道に敷かれることはまったく疑いがない」として、「そのときにはクリミアはアジアへ向かうヨーロッパ大鉄道の間中に位置することになり、それはクリミアの交易上、および政治上の意義を一変させることになる」と述べている。

結局、ヴォローシンの願いは（マツキンダーの提案と共に）叶わなかったが、しかし、重要なのは彼の地詩学的な思考様式の方である。彼はこの北緯四十五度鉄道に関して、次のように述べている。「クリミアの未来は、一見するよりもはるかに密接に、その過去と結びついている」。「二二三」。つまり、いわば「十六世紀以後」に根を持つ帝国主義的な、地政学上の構図も、「十六世紀以前」という「過去」に規定されているのであり、そうした構図を打破しようとするときも、その「未来」は、現在のうちに秘められている「過去」を回復することで見いだされるのである。そうした「過去」とは、今の場合は「かつての隊商の道」、すなわち、地理、地形、地名として、土地に物質的な形マテリアルで刻まれた痕跡である。地政学も、地詩学も、そうした痕跡に対してとりうる二つの関係、ないし態度なのだと言いうことができるだろう。

以上、日露戦争および第一次世界大戦という出来事によって区切られる一時期における、クリミアをめぐるマツキンダーとヴォローシンの言説を検討してきた。これら二つの（ロシア東端と西端での）戦争は、マツキンダーの観点からすれば、世界のランド・パワーとシー・パワーの新たな均衡関係の中

で、ロシアを一つの軸として展開していったのであり、そのランド・パワー帝国としての基盤は、ペテルブルグとクリミアという二つの（北と南の）焦点を有していた。一方、ヴォロシーンの個人的生において、この時期はペテルブルグからコクテベリへの、すなわち「塔」から「詩人の家」への移動の時期であり、これはロシア詩壇の状況に照らすなら、象徴主義からポスト象徴主義（コクテベリでヴォロシーンの薫陶を受けたM・ツヴェターエワやO・マンデリシュタムらによって担われた²⁴）への移行と対応している。さらに、この時期がロシアにとつては同時に、「血の日曜日」（ポチョムキン号の叛乱が思い出される）からロシア革命に到る転換期であったことも、もちろん忘れることができない。

このように、地理的布置の力学による歴史の進展は、幾重もの層をなしているのであり、その重層性の中でこそ、地政学も、また地詩学も成立するのだと言える。両者の違いは、戦略のための筋道^{メソッド}として機能する地政学が、この重層性の中で、最終的には一元的な決定性を目指すのに対し、地詩学はそうした重層性、多元性のみを志向するということであろう。一九五四年、フルシチョフによりクリミアがウクライナ共和国へ移管された後、ソヴィエト連邦は崩壊し、今日、半島はウクライナの領土内にとどまっている。こうした状況はクリミアの歴史の中でどのように位置づけられるのか、また、こうした状況の中にあつてクリミアの文化のアイデンティティはいかなるものでありうるのか、それを考えるために、私たちはただ、地政学と地詩学を自らのうちに分かちがたく保つてゆくしかないように思われる。

（付記）本稿は二〇一三年十一月に脱稿されたため、二〇一四年二月のウクライナ政変、およびそれに続くクリミア情勢の緊迫化については触れられていない。ヴォロシーンの詩学の意味も、こうした状

況の中で問われるのかもしれない。

¹ 曾村保信『地政学入門…外交戦略の政治学』中公新書、二〇〇九年(初版一九八四年)、八六一―八七頁。
「地政学」という用語自体は、スウェーデンの地理学者ルドルフ・チェレーン(二八六四―一九二二)が一九〇五年に提唱した(同書、八六頁)。

² V. Golovanov, G. Grineva, “Geopoetika Kenneta Ujta” [www.liter.net/geopoetics/golov.html#].

³ ちなみに、マッキンダーは一九一九年から二〇年にかけて、「南ロシアにおける英国の高等弁務官としてオデッサに駐在し、ボルシェビキに対抗する白ロシア軍(白軍の誤りと思われる——引用者)の勢力をまとめることに苦勞した」というが(H・J・マッキンダー(曾村保信訳)『マッキンダーの地政学…デモクラシーの理想と現実』原書房、二〇〇八年、三二六頁)、ヴォロージンも一九一九年、五月までオデッサに滞在していた。

⁴ マッキンダー『マッキンダーの地政学』、三一五頁。

⁵ 曾村『地政学入門』、一五頁。

⁶ A・T・マハン(麻田貞雄編・訳)『マハン海上権力論集』講談社学術文庫、二〇一二年、二二五―二二八頁。

⁷ 同右、四四―四五頁。

⁸ 曾村『地政学入門』、六一頁。

⁹ ヴォロージンがそのクリミア観を披歴しているのは、主に以下の評論においてである。M. Voloshin, “K. F. Bogaevsjij,” *Zolotoe runo*, no. 10 (1907); “Arkhaizm v russkoj zhivopisi. Retikh, Bogaevsjij, Bakst,” *Apollon*, no. 1 (1909); “Konstantin Bogaevsjij,” *Apollon*, no. 6 (1912). このうちに、ヴォロージンの地政学的クリミア解釈は、個々の絵画評論の中で折にふれて表明されてきたが、それをまとまった形に集めたのが、後述する一九二五年の『クリミアの文化、芸術、史跡』である。ちなみに、彼の地政学的言説は、他の絵画評論においても見いだすことができる。たとえば、アルメニアの画家サリヤンについての評論『M・S・サリヤン』(一九一三)

の第一章「オリエンタリズム」では、ヨーロッパが「アジアの巨大な身体」に育った寄生植物と定義され、全体がヨーロッパとアジアの文化的関係の地詩学的記述となっている。(M. Voloshin, *Sobranie sochinenij*. T.5 (Moscow: Ellis Laks 2000, 2007), pp.149-150)。

¹⁰ Golovanov, Grineva, “Geopoetika Kemeta Ujta”.

¹¹ A. Mal'gin, “Moskovskij Krym mezhdū geopolitikoj i goepoetikoj. Zametki s “kruglogo stola” Krymskogo geopoeticheskogo kluba” [http://ok.archipelag.ru/par2/moskovskiy-krim.html].

¹² I. Sid, “O vole k Voloshinu.” *Izvedenie v goepoetiku* (Moscow: Arthouse media, Krymskij klub, 2013), p.71.

この論集は、ロシアにおける地詩学の二〇年にわたる活動を概観でき、今のところ唯一の文献と思われる。ケネス・ホワイトのエッセー、インタビュウからの抜粋、ロシア地詩学を代表する論客イーゴリ・シッドとユーレイ・アンドルホヴィチ Yuri Andukhovich の諸論考、モスクワでの第一回(一九九六年)、第二回(二〇〇九年)地詩学会での議論、二〇一〇年にドイツで刊行された論集『複数の』地詩学『Geopoetiken』の巻頭論文の翻訳等が収められている。ロシア地詩学におけるヴォロシンの位置づけについては以下も参照。G. Dajs “Kul'turtegerij i triksierij nachala veka. Maksimilian Voloshin, Igor' Sid” [http://www.polutona.ru/?show=reflect&number=25&id=307].

¹³ シッドは自らの地詩学をホワイトのそれに対して「実践的地詩学」と呼び、それは「人類の、権力への意志から創造的意志の時代への移行を確認する」と述べている (Mal'gin, “Moskovskij Krym mezhdū geopolitikoj i goepoetikoj”).

¹⁴ その詳細については以下を参照。齊藤毅「マクシミリアン・ヴォロシンのキンメリヤ——初期評論、および連作詩『キンメリヤの夕闇』から」、『ロシア語ロシア文学研究』三三、二〇〇三年、一三一—一四頁。

¹⁵ 齊藤「マクシミリアン・ヴォロシンのキンメリヤ」一九—二二頁。

¹⁶ 同右、二二—二三頁。

¹⁷ 以下、マッキンダー『歴史の地理学的な回転軸』、『デモクラシーの理想と現実』からの引用は、マッキンダー『マッキンダーの地政学』から行ない、前者をG、後者をDと略記して、頁数を本文中に示す。ま

た、後者の英語原文からの引用は以下から行ない、頁数を邦訳の頁数の後に本文中に示す。H. J. Mackinder, *Democratic Ideals and Reality: A Study in the Politics of Reconstruction* (New York: H. Holt and company, 1919), 「ヴォロシンの『クリミアの文化』芸術・史跡」からの引用は以下から行ない、頁数を本文中に示す。M. Voloshin, *Koktebel'skie berega* (Simferopol': Tavrija, 1990), この文章は『クリミア・ガイドブック』(Krym: Putevoditel' (Moscow, Leningrad: Zemlja i Fabrika, 1925)) のために書かれたものである(註九を参照)。

¹⁸ ドイツの政治学者カール・シュミットも、十六世紀における西欧諸国の外洋への進出と、ロシアのシベリア遠征との平行関係を指摘し、それを「大航海時代」というよりは、海にしろ陸にしろ、歴史において初めて無限で空虚な空間が出現した「空間革命」の時代としている(C・シュミット(生松敬三、前野光弘訳)『海と陸と』世界史的一考察』慈学社出版、二〇〇六年、七二―七九頁(原著は一九五四年刊)。この「空間革命」を、近代における空間のデカルト的な座標軸への抽象化と関連づけることは可能だろうか。ちなみに、シュミットはハウスホフナー主宰の『地政学雑誌』への寄稿者でもあった(曾村『地政学入門』、一八一頁)。

¹⁹ ちなみにヴォロシンの連作詩『キンメリヤの夕闇』の第八篇は「Mare Internum」と題されており、また一九二〇年には「Dikoe Pole」という詩が書かれてゐる。

²⁰ Voloshin, 「K. F. Bogavskij」, p.27.

²¹ この点に関し、マッキンダーは次のようにも述べている。「一九世紀のヨーロッパに起こった社会的な変化のなかで、あまり眼にはつかなかつたが、おそらく最大級の意味をもつものは、ロシア農民の南方移住という現象だろう。「……」オデッサの勃興もまたほぼこれにともなっているが、この町の成長の早さにかなうものは、おそらくアメリカの新興都市ぐらいなものだろう」[G:二七五―二七六]。これは、一八六七年にオデッサを訪問した際のM・トウエインの次の記述と一致している(あるいは、マッキンダーはトウエインを引用したのだろうか)。「この街の人口は十三万三千人で、アメリカをべつにすれば、ほかのどんな小都市でもこれほど急速に発展しているところはない」(M・トウエイン(吉岡栄一他訳)『地中海遊覧記…下』彩流社、一九九七年、一一一頁)。

²² マツキンダーは、他に国際化が必要な地域として、パレスチナ、シリア、メソポタミアを挙げているが、これらについては「最近（一九一九年当時）英国とフランスとが国際的な信託を受ける了解が成り立った」と述べている〔D.:二〇四〕。

²³ 「北緯四十五度鉄道」という名前は、この鉄道が通過するイタリア、ユーゴスラヴィア、そしてクリミア半島がちょうど北緯四十五度、すなわち赤道と北極の中間点に位置することにちなんで付けられたものと思われる。

²⁴ マンデリシュタームが「詩人の家」において知ることになったクリミアの風土の、彼の詩学への影響、同様に「詩人の家」で出会ったマンデリシュタームとツヴェターエフとの創造的交流については、例えば以下の拙論を参照。齊藤毅『異なるもの』の時間——ツェラーンに読まれたマンデリシュターム』、『表象』〇六、二〇一二年、一五三頁。〇・マンデリシュターム『Tristia』冒頭の諸詩篇における革命、流刑、性愛のモチーフについて、『SLAVISTIKA』XV、二〇〇〇年、一一二—一三五頁。しかし、マンデリシュタームとツヴェターエフのケースはほんの一例にすぎず、一般にヴォロージンが没する一九三〇年代までロシア文化全般において「詩人の家」が担った役割をもっと高く評価すべきと思われる。A・ベールイによれば、化学者S・レーベデフのような学者たちの何人かは、世界的発見の着想を「詩人の家」で得たという（A. Belyj, ‘Dorn-muzej M. A. Voloshina,’ V. Kuptchenko and Z. Davidov, eds., *Vospominanija o Maksimiliane Voloshine* (Moscow: Sovetskij pisatel’, 1990), p.507)。

